CLOSE UP クローズアップ

新たな能楽ファンの開拓に意気盛ん

こども教室「能とあそぼう!」にて（2009年1月）　写真:おおつかひろふみ

国登録文化財である由緒ある山本能楽堂（大阪市中央区）で、紙で作ったクモの巣をはり巡らせたり、狐のお面を作って能楽を楽しむ子どもたち。また、演者による解説付き、字幕付き、軽食付きの能公演を楽しむ“ 能初心者 ”たち。3代目当主で能楽師の山本章弘さん（48）は「伝統芸能をもっと身近に感じてもらいたい」という思いで、「初心者も楽しめる能舞台」の普及に知恵を絞っている。

◇能楽一家に生まれて◇

オフィスビルやマンションに囲まれた、3階建ての家屋。その玄関をくぐると木と畳が薫り、歴史に磨かれてきた『能舞台』が広がる。松野奏風作の鏡板、西本願寺の北舞台を模した橋懸かりの欄干、厚い桧皮（ひわだ）ぶきの屋根…。エアコンが取り付けられたほかは、建設当時の趣を残す。

初舞台は3歳。自宅では父親が朝から謡をうたっていたり、祖父の家が能楽堂だったりと、能楽は日常生活の一部だった。しかし、周りの子どもたちの能楽への理解は浅く、「稽古や舞台が嫌だった」。それでも続けられたのは、「チョコレートなどのご褒美が嬉しくて」と懐かしむ。

大学卒業と同時に上京し、故二十五世宗家観世左近に入門。師匠が父親から家元に代わり、「偉大だった父親を客観的に見られるようになった」。5年半の内弟子修行を経て大阪に戻り、独立する。現在は二十六世宗家観世清和に師事し、後進の指導にも当たっている。

◇体感する場を創出◇

山本家一門による定期公演『たにまち能』（年6回公演）は、戦災後再スタートした1950年から続く。「仕事帰りに気軽に来てもらいたい」と近年始めた『とくい能』（年5回公演）は、夜7時半に始まる初心者向けの公演だ。軽食付きで、公演前後に解説や質疑応答の時間も設けている。

能のほか、文楽や狂言、落語、講談、上方舞、浪曲などの伝統芸能を「デパ地下の試食コーナーのように」楽しめる『上方伝統芸能ナイト』も手掛ける。「大阪はお笑いだけじゃない。こんなにお洒落なエッセンスを持った人がいっぱいいるということも知ってほしい」

そのほかにも、能の体験講座『まっちゃまちサロン』（毎月第1月曜）や、能『羽衣』の終曲部を演者と観客が合唱する『200人の羽衣』公演、現代美術家を招いて新たな視点を取り入れた小学生対象の体験型講座など、能を体感できる機会を多く設ける。「観るだけでなく参加することで、より能を楽しめるようになる」という思いからだ。

◇ファン獲得に積極果敢◇

異業種交流の場などで能楽師の名刺を渡すと、「普段は何をしてはるんですか？」と聞かれるという。「『普段も能楽師です』と言うとびっくりされる。それで生計が成り立つのかって表情で（苦笑）」。脈々と歴史を刻んできた伝統芸能の存在をもっと知ってほしいという思いは強まる一方。

そこで、人の集まる駅のコンコースやホテルのロビーなどで『能楽ライブ』も始めた。能衣装で登場すると「何だ何だ？!」と人だかりができ、興味津々と見入ってもらえる。「海外ブランドの店の前で上演したときなど、いかに西陣織の衣装がハイレベルか分かった」と新たな発見も楽しむ。

当たり前のように能楽の道に入ったが、「伝統芸能という特別な世界」という自覚を持って世間と歩み寄る姿勢を大切にしている。地元とも連携し、「現代に生きる魅力的な芸術」としてさらに発展させていくにはどんな策があるのか。遊び心を持ちながら試行錯誤する毎日だ。

（文・江中咲紀／表紙写真・高島悠介）

プロフィール

観世流能楽師

山本（やまもと） 章弘（あきひろ）さん

1960年大阪生まれ。幼少より父親に師事し、83年に故25世宗家観世左近に入門。現在26世宗家観世清和に師事。（社）能楽協会大阪支部常議員、重要無形文化財総合指定保持者、日本能楽会々員、（財）山本能楽会理事長として「とくい能」「上方伝統芸能ナイト」などの新事業を立ち上げ積極的に普及活動を行っている。「大阪文化祭奨励賞」（2000年）、なにわ大賞「大阪21世紀協会賞」（2007年）、平成21年パナソニック教育財団奨励賞など受賞。